

不登校児童生徒の再登校を援助するには

萩 昌子（大阪）

要旨

キーワード：

はじめに

青少年問題の研究会で、不登校の子どもに対する学校の取り組みとして次のような話がありました。

「小学校6年生の女の子で、長い間学校を休んでた子のことなんですが、先生方が熱心に働きかけたのですが、なかなか学校へ来てくれませんでした。ある日の放課後、その子が2、3人の友だちと校庭へ遊びに来ました。それを見た先生たちはその子と話をしましたが、その子は明るく元気だったので、それで、『明日から、学校へおいでよ』と先生が言うと、その子は『はい』と返事してくれたのです。翌朝、校門で待っていたのですが、その子は現われなかったんです。

これをお読みになってどうお感じになりますか。

「登校拒否の子って、こんなよね。返事はいいんだけど実行が伴わないのよ」と思われますか。それとも、「いきなり明日から登校しなさいというのが無理な話だったんじゃないかな」と思われますか。

実際に起こった結果を見ると、登校しなかったのですから、子どもにとっては無理な約束だったのではと筆者は思います。けれども、問題の渦中にいる人は、なんとか早く問題を解決しなければと思うあまり、子どもの小さな歩みを助けるどころか、逆に後戻りさせてしまうことがあるようです。

学校から撤退していた子どもが元気を取り戻すと、学校とのつきあいを考え始めます。その時の対応が意外とむずかしく、子どもがスムーズに学校とのつき合いを再開できる場合と、関心が学校へ向かいながらも再度登校を断念してしまう場合とがあります。そこで、不登校児童生徒の再登校を援助するにはどのようなことに気をつければいいのか、どうすれば教師と子どもの信頼関係が回復できるかについて考えてみたいと思います。

再登校を援助する4つのポイント

1、先走りしないで、現在の子どもと明るくつき合しましょう

『保健室でもいいし、相談室でもいいよ。もし、朝から無理だったら昼から来ててもかまわないよ。教研へ相談に行くと出席扱いになるんですよ』といろいろ言ってみたのですが、子どもは黙

って下を向いているだけで、反応がないんです」と、不登校の子どもを家庭訪問した先生から伺うことがあります。確かに、子どもが再登校を試みる場合、いろんな工夫が考えられます。けれども、子どもが再登校しようという気になっていない場合は、このような提案そのものが子どもや保護者の負担になる場合があります。

子どもが学校へ行く元気をなくしている時には、子どもが元気になるように働きかけるのが先決です。先のことよりも、その時点の状態子どもと話しができ、仲良くなることから始めてください。

例えば、外出したがる子どもをなんとか外出させようと働きかける前に、外出しない状態の子どもと楽しく過ごせることを目標にしてください。また、放課後なら学校へ来れる子どもを早く授業に入れようとする前に、放課後に無理なく楽しく学校に来れるのが定着するように子どもを援助することを当面の目標にしてください。このままの状態ではいけないと見られると、子どもは自分が達成できていることに自信を持つことができませんし、つぎの段階に進む元気がでないのではと筆者は考えるからです。

初めに紹介した小学校6年生の女子の例で言うなら、まずは放課後に遊びに来てくれている状態でしっかりと子どもとよい関係を作ることが大切です。そうして、放課後なら友だちと遊びに学校へ来る状態が安定して持続でき、その中で、子どもが今どんなことを考えているのか、どうしたいと思っているのかを話してもらえようような関係を作ることから始めなければいけないと思います。

ところが、子どもが学校から撤退している時期は、学校の先生にとって子どもと接触を持ちにくい時期です。なぜなら、学校の先生が不登校の子どもを家庭訪問すれば、何も言わなくとも、登校を強制されるのではと子どもは予測するからです。学校へ行きたくない子どもと学校へ来させようとする先生とでは、仲良くなることはむずかしいでしょう。この時期に子どもと接触できる先生の話をお伺いすると、学校へ来させようとする前に、まず子どもとの関係づくりに全力を注がれているのが共通しています。

ある中学校の先生は、何度家庭訪問しても会ってもらえない子どもに対して、家の外から「無理に学校へつれて行こうとは思ってないよ。顔を見に来てただけだ」と大声で宣言し（これがウソになっては信用されません）、子どももそれならばとやっとな扉をあけてくれて会えるようになったという話がありました。

また、日を決めて昼休みにお弁当をもって訪問し、不登校の子どもと昼食をともにしたという先生もおられましたし、家に閉じ込もっている子どもが外出できるようにと散歩に誘ったり好きな映画と一緒に見に行ったりした先生もおられました。その先生が担任されている間に登校に至らない場合もありますが、相談員として経過を見ていますと、子どもが次のステップに進む原動力になっていると思われる事がよくあります。

教育相談で子どもたちを見ていると、子ども自身がその時その時の自分の状態を肯定し、楽しく過ごせると、さらに元気になるように筆者は感じます。例えば、中学2年のMさんの場合、相談に来所した当初、「学校へ行かされるくらいなら死んだ方がましだ」とさえ言っていました。保護者が登校させることを断念し子どもを信頼するようになると、Mさんは家庭で明るく元気に過ごすようになりました。そして、教育研究所で行っている不登校生徒のグループ活動に参加し始めたのが5月ごろでした。それから4ヶ月間はこのグループ活動で出会った友だちと、まさに“遊びほうけて”いて、とても元気に楽しそうに暮らしていました。相談員も「そんなに元気なら学校へ行けるんじゃないの…」と思わず言ってしまうくらい元気だったのです。そうこうするうちに子どもたち同士で「学校へ行こう」という会話をするようになり、9月から保健室登校を始めました。保健室登校が安定すると、担任は次は教室へとステップを考えておられました。

相談員が子どもに聞くと、「教室に入るんは3学期でええやん」と言います。「先生に教室に入ろうと言われたら、どうするの？」と相談員が聞くと「いややと言えればいい」、「自分で言える？」「言えるよ」というようなやりとりをする時期がありました。相談員は子どもが3学期から入ろうというのに対して、「3学期の終わりころでもいいんじゃないの」などとむしろたづなをひっぱる場合があります。それは子どもががんばりすぎて息切れしないようにと思うからです。ところが、こういう話をして3週間ほどしかたたないうちに、「教室へ入ったけど、おもしろかったわ。ぼちぼち教室で勉強するようにしようかな…」などと言い出すようになりました。

どの子どもがこのようなペースで学校に復帰していくわけではありません。けれども、必要とする時間の長短はあっても、確かな歩みをする子どもは、いつも自分のいる段階をエンジョイできているように筆者は感じます。つまり、学校に行かない時期はその時期にできることを楽しんでいきますし、別室登校すればしたで早く教室に入れるようにならなければとは考えずに別室登校を楽しんでいます。そうすることで、力を蓄え次のステップに無理なく進んで行けるようです。子どもがこのように過ごせるには、子どもを取りまく周囲の手助けも必要です。そのためにも、周囲の人々が先をあせらず、子どもとその時の状態で存分に楽しくつきあうことが大切だと筆者は考えます。

子どもに安心してもらえ、子どもが元気になる関係を作ろうとすれば、子どもがしたくないことやできそうにないと感じていることを、一方的に約束させたりしないことです。子どもが楽しめる事を一緒にしたり話せるようになれば、子どもは先生とよい時間を過ごす事でより元気になっていくでしょう。

2、欲ばらないで、スモール・ステップを確実に歩いて行きましょう

子どもが久しぶりに母親と学校へ来ました。親子が午前中で帰ろうとするので「せっかく来たんだから給食も食べて帰ったら…」と言ったり、「明日もきつとおいでや」と教師が言うと、子どもはうなずいてくれました。けれど、翌日に子どもは登校しなかった、というような経験はありませんか。

子どもの感想を聞くと、「4時間目だけと思ったのに、給食まで食べないといけなかった…」とか、「必死の思いで行ったのに、明日もがんばっておいでと言われてしんどかった」などと教えてくれることがあります。自分の心づもり以上にがんばりすぎたため、続けてチャレンジする元気がなくなるようです。

子どもが新しい課題にチャレンジし始めた時、ここまでできたのならもう一押しががんばらせようと、さらに課題を追加するのは禁物です。

冒頭の話で言うならば、久しぶりに放課後に校庭へ来ることができた子どもに対して、「あしたの朝から登校」という目標はどうでしょう。子どもにしてみれば、ちょっと学校へ顔を出すとすぐ「登校を！」と言われるのでは、うっかり学校へは近寄れないと感じるかもしれません。また、2、3人の友だちと遊びに来るのと、朝から登校するのとを比べてみましょう。まず、登校時間で比べると、(放課後)が(朝から)になり、友人関係では、(2、3人の友人とだけ)が(全校児童と一緒に)となります。また、何をするかについて見ると、(遊びに来る)のから(勉強はもとより学校生活全部をする)こととなります。いつ帰れるかという点では、(好きな時に帰れる状況)から(時間割どおりに過こさなければならぬ)こととなります。

このように考えると、『あしたの朝から登校』がいくつもの要素について大きなステップとなっていることがおわかりいただけるでしょう。新しい段階に進む場合には、2つ以上の新たな課題をおりこまない方がいいでしょう。なぜなら、もし、次の段階がクリアできなかった場合、どの要素がその子どもにとっては難しいことだったのかがわかりにくくなるからです。

子どもが放課後に友人と遊びに来ることが安定してから、もし、つぎのステップを考えるとすれば、例えば、終りの会からクラスに参加して放課後に友人と遊んで帰るといのはどうでしょう。実際、そのように終りの会からクラスに参加し始めて、次に最終時限の授業に参加というように、終りから徐々に朝に向かって部分登校を積み上げていって、再登校するようになった小学生がいました。

ステップ・バイ・ステップ。一步一步確実に進んで行きましょう。

ただし、小さいステップだからといって、つぎつぎと際限なく目標を設定しないでください。建物の階段だって、踊り場が必要です。小さいステップであっても、休みなく昇り続けられるものではありませんから。

3、勝手に判断しないで、子どもと相談しましょう

子どもが部分登校を始めると、“このままの対応でいいのかしら、もうクラスに入れるんじゃないのかな。ちょっと強く言ってみても大丈夫かな…”などと判断に迷うことはありませんか。

子どもがどれくらいがんばれそうか、先生に助けてほしいことがありそうかななどは、どんなに子どもをよく理解している先生であっても、いつもの中するものではありません。大人が判断するのではなく、子ども自身が自分のできそうな目標を立て、自分で解決していくように子どもを援助したいものです。このような問題解決の過程もまた、子どもの自立を促すためには大切だと筆者は考えます。

子ども自身に関わる事は本人に聞いてみるのが一番です。「それができれば苦労はしませんよ。そう簡単に子どもは自分の意見を言ってくれないですよ」と思われる人がおられるかもしれません。そうお感じになるとしたら、ひょっとすると、子どもが望んでいない方向へ先生が子どもを動かそうとしてははいないでしょうか。例えば、「保健室だったら来れそうか、それとも相談室がいいか」と聞いても子どもははっきりと答えてくれないというような場合、そもそも、別室登校から試みようという目標が先生と子どもの間で確認できていたかということ振り返ってみてください。その点が両方で本当に合意できていれば、話は先へ進むはずですよ。

そもそも、子どもが望んでいない方向にがんばらせることなどできません。子ども自身にかかわることは、子どもの意見を聞き当面の目標を確認し、子どもと相談しながら、子どもがチャレンジするのを応援しましょう。

再度、冒頭の例で考えると、女の子が放課後に遊びに来たのは、翌朝から登校するための準備だったのでしょうか。たまたま友だちと遊ぶ場所がその日は校庭でという事になっただけで、登校を開始しようという気はなかったかもしれません。あるいは、久しぶりに先生と話したいと思って学校へ遊びに来たのかもしれません。こういうことがわかれば、子どもがチャレンジしようとしていることを援助しやすくなります。

では、なぜ、子どもは登校できないかもしれないのに、「はい」と返事をしたのでしょうか。その子の場合はどうだったかは本人に確かめなければわかりませんが、先生の提案にたいして子どもが「できません」という返事ができたのでしょうか。もし、子どもが「ちょっと、それは…」と難色を示すと、どんな事態が予想されるでしょう。きっと、「学校へ来ないと困るよ」とか「クラスのみんなも待ってるよ」とか「元気なんだからがんばって来なくちゃ」、「このまま休んでたらどんどん勉強もわからなくなってしまうよ」というような話になるでしょう。子どもは賢いです。こう言えばおとな（教師や親）がどう説得にかかるかはそれまでの経験から学んでいます。ですから、その場を切り抜けるために大人の納得する返事をするようになるでしょう。

ある課題にチャレンジした時は、達成できたかできなかったかの結果だけを見るのではなく、チャレンジしてみた子どもの感想も聞くようにしてください。がんばってやったものの、これを

続けるとなるとたいへんだと感じた場合と、これなら続けてやっていけそうだと感じた場合では、その後の目標修正の程度が違って来るからです。

おとなの願いや期待を押しつけるのではなく、子ども自身が課題を乗り越えて行けるようにお手伝いするのだと考えてみてください。

4、ひとりでしょい込みすぎないで、チームワークを考えましょう

不登校の児童生徒数が増加傾向にあり、子どもが登校しやすいような工夫が求められている今日、学校でも不登校の子どもへさまざまな取組がなされています。それは、担任一人のがんばりのできることはばかりではないかもしれません。どんな時に誰がどんな役割分担をするかについて、校内での話し合いが必要となる状況が出てきています。

もし、担任が授業をしている時間に子どもが学校に来たら誰が対応するのか。また、それが毎日の場合と一週間に2回程度の場合とでは、学校の態勢も変わってくるでしょう。あるいは、登校するようになったが教室には全く入らない場合、どんな形で学校として教育的サービスを提供できるかという問題もできます。これについては役割分担が明確になっているわけではありません。その学校の実情と子どもの状態に応じて作り出していかなければなりません。

教育研究所の教育相談でも、相談員が直接子どもや保護者と面接して相談を進めるだけでなく、学校内の態勢づくりについて先生方と検討することが相談のウェイトを占める場合が出てきています。

不登校児童生徒への取組については、担任だけでなく、学校としてどんな態勢がとれるかを学校全体の課題としてとらえる視点が、今後ますます必要になっていくと思われます。

再登校に成功した例

例1：保健室からのお手紙作戦

小学校2年生のNくんは学校を休むようになりました。担任にはこれといった原因は思い当たりません。しいていえば、いい加減なことを好まなくて、何事もきちんとしたいという性格の子どもでした。ひょっとしたら、その性格がかえって学校生活をしんどいものになっているかもしれないと推測できる程度で、不登校の理由はこれと違ってわかりませんでした。Nくんの欠席を聞いた保健室の先生は、Nくんの姉に頼んで、Nくんへ手紙を届けてもらうようにしました。その手紙には登校を促すようなことは全く書かれていません。なぜなら、保健室の先生は、学校の中にも気楽に話ができる人がいることを伝えたいと考えたからです。手紙の内容は、好きなテレビ番組をたずねることや、簡単なクイズだったりでした。初めは読むだけだったのが、「クイズが簡単すぎるから、もっとむずかしいクイズにしてほしい」などとNくんから注文が返ってくるようになりました。Nくんが手紙を楽しみにしていて、だんだんと元気になってきたと保護者からの連絡が入るようになりました。そんなことを続けていたある日、Nくんは「明日から学校へ行くわ」と言って友だちと登校してきました。それには、いつも手紙を運んでくれていたNくんの姉もびっくりしたようでした。登校し始めてからもしばらく手紙は続きました。その場合も、手紙は続けるか、手紙はどのようにして受渡しするのがいいかなどについて、Nくんの意見を聞くようにしました。登校し始めて少しの間は、保健室に立ち寄って、手紙を受け取ったり先生と話をして帰ることが続きましたが、そのうち保健室に立ち寄ることもなく、元気に登校するようになりました。

子どもとの関係回復の窓口が担任でなければならないということはありません。子どもとかか

わりやすい人が学校を代表してとっかかりをつけると考えてはいかがでしょうか。

例2：母親と一緒に登校するKさん

小学校の低学年のKさんは登校をしづつはいましたが、母親となら登校できるという子どもでした。母親がKさんを少しでも早く一人で登校させようとするのに対して、Kさんは一人にさせられまいと抵抗しているように相談員には見えました。そのため、Kさんが教室に入って授業に関心を示すと、母親は自分がいなくても大丈夫そうだからとこそっと帰ろうとします。すると、Kさんは母親を自分から離すまいとし関心を母親に移すということが起きていました。そこで、相談員も加わり先生方とKさんとお母さんとで話し合い、Kさんの意見を聞きながら、学校での当面の過ごし方について取り決めをしました。お母さんがKさんの登校につきあえる時間帯を決め、Kさんが友だちと元気に遊んでいても授業に熱中していても、約束した時間はKさんの登校につきあうこと、まわりの大人がお母さんが帰っても大丈夫だと勝手に判断しないことなどを決めたのです。その結果、Kさん親子は落ち着いて学校で過ごすことができるようになりました。その後、母親のいる場所を、教室の中から廊下へ、そして他の部屋でというふうにKさんの理解をとりながら段階的に離していきました。時間はかかりましたが、Kさんは一人で登校するようになりました。もちろん、それまでの間、お母さんがそばにいなくてもKさんが担任や友人と楽しく過ごせるように担任の先生はKさんへの働きかけを工夫されました。

例3：T中学校の取り組み

不登校で相談に来ていたSさんはだんだん元気になってきて、別室登校ならチャレンジしてみようということになりました。たまたま同じ学校の不登校のYさんと知り合う機会があり、一緒に別室登校を試みることになりました。

1日2時間週2、3日程度を目標に相談室登校を始めました。同学年の他の生徒とは顔を合わせたくないとのことで、二人は休み時間を避けて校舎に入るようにしました。二人を受け入れた先生方がまず心がけられたことは、二人がリラックスして登校できるようにということでした。ですから、早く勉強をさせようとか、もっと登校時間を長くしようとか、教室に入れるようにとかは当面の目標とはされませんでした。初めは、二人の意見が聞け相談ができる関係づくりの期間と考え、雑談をしたり気楽に話ができるような雰囲気づくりに先生方は心がけられました。

二人は勉強の用意を持ってきて自分たちだけで勉強していました。疲れるとふたりでおしゃべりしている時間も多かったようですが、先生方は相談室での過ごし方はふたりに任せておられました。

そんな時期が過ぎて、登校日も勉強時間も増えていきました、相談室登校にチャレンジすることに精いっぱいだったふたりも、相談室になれ、自分たちだけで勉強するのもやや退屈になってきました。その頃になって、「毎日登校しているのだから、もう少し勉強もみてほしい」という子どもからの要望がでてきました。学年の先生方で話し合われて、二人の学習を指導する態勢を組み、1日3時間の彼ら向けの時間割が作られました。

二人が別室登校にチャレンジし始めた時には、相談員には子どもたちと先生の間で橋渡しをする役割がありましたが、ふたりが意見を言いやすいような関係づくりを先生方が心がけてくださったので、別室登校が定着してからは、学校での過ごし方や勉強の相談やテストの受け方なども先生と子どもたちとで話し合っ決めていくようになり、相談員の出番はだんだんなくなっていきました。

別室登校しているふたりにどんな教育的サービスができるかについて、学年としての取り組みがあり、それを支える学校全体の受け入れ態勢があって、順調に展開していった例のひとつです。

もう一つの仕事、クラスの雰囲気作り

不登校の子どもへの再登校を考える場合、学校（先生）との関係が良好であることはもちろん大切ですが、子どもが学校にもどっていく場合、クラスの子も同士の関係についても考えなければいけません。先生との関係だけではなくクラスメートとの関係も子どもの学校生活には大きな影響をもたらします。先生との関係がよくても、クラスの子もたちから冷たい視線を感じるのでは子どもは教室にはもどりにくいでしょう。

「〇〇さんだけ宿題して来なくてもいいの?」とか、「〇〇さんが来たり来なかったりして、日直の日に休んだりするから困るわ」、「元気そうなのに、どうして毎日登校しないの?」というような発言をクラスの子もがするとどう対応されますか。

不登校の子どもへの部分登校をクラスの子もたちがどう見るか、子どもたちにどう説明するかは、担任には一つの課題となることでしょう。

段階的に登校を試みる子どもや、その子なりの学校とのつきあい方を模索する子どもをクラスメートがどう見るかは、大きく分けると、「あの子も少しずつがんばっているんだなあ」と応援しようとする場合と、「あの子だけずるいなあ、楽なことして」と批判的に見る場合のふたつが考えられます。この違いは、ひとつには、クラスの中のルールのあり方が関係していると筆者は考えます。

例えば、給食が苦手な子どもにたいして、嫌いな物は残してもいいから学校へ来るようにと教師が言ったとしましょう。

クラスの子もたちが給食を楽しみにしていたり、食べられない物があっても叱られるわけではない場合は、給食を避けたい子どもに対して、「給食はおいしいのにねえ…」とか「嫌いな子もいるんだなあ」くらいに思うでしょう。けれども、絶対残してはいけない、好き嫌なく全部食べなくてはならないという決まりがあって、しかたなく決まりに従っている子どもたちは、給食を逃げる子どもをどう見るでしょう。残してはいけないという指導が教師の権威によって徹底していればいるほど、嫌いなものをがんばって食べる子どももいますが、一方では、給食を逃れられる子どもにはクラスの風当たりが強くなるでしょうし、教師の権威が脅かされるという弊害も起こりえます。弊害を避けるには、ある子どもにだけ「食べなくてもいい」特例を認めるそれなりの理由が必要です。しかも、クラスの子もたちが納得する理由でなければなりません。もし、その子が給食を食べない以外は元気でふつうに過ごせると、特例的措置は認められにくくなるでしょう。結局、このようなシステムの中では、特別な事情のある子として給食を避けられる代わりに、その子はクラスの一員として認められにくいという代償を支払うこととなります。

給食を例に考えましたが、ことは体育であっても、宿題であっても、生活指導上の何かの決まりであっても同様です。クラスにどんな決まりがあって、それを守らせるためにどのような手段が用いられているかによって、クラスの雰囲気（人間関係）が違ってきます。ですから、部分的な登校や段階的な登校を好意的に見るクラスの雰囲気を作るにはクラスの運営方法を考える必要もあるわけです。

子どもたちどうしが各々の能力に違いがあることを認め、各々の特質を認めあうようなクラスであれば、子どもたちは友好的で和やかに過ごすことができ、学校生活を楽しむことができます。ですから、不登校の子どもへの部分的な登校を応援するクラスの雰囲気づくりは、学校での子どもの居場所づくりを助けるだけではなく、不登校そのものを予防することにもなると筆者は考えます。不登校傾向の子どもが、学校での対応によって不登校に陥らずにすんだ事例もあり、それらについては、また別の機会に報告したいと思います。

おわりに

学校へ行く元気をなくした子どもに対して、保護者は子どもが再度社会（学校）へ出る勇気を持てるように援助することができます。保護者の援助によって子どもが元気になると、同年令の友だちと遊ぶという課題にチャレンジするかもしれませんし、勉強に取り組む勇気が出るかもしれません。

その結果、子どもが再登校する場合がありますが、子どもが元気になりさえすれば学校へもどって行くとは限りません。例えば、公教育に頼らず自分たちで学びの場を求める方向に活動し始める子どもや保護者もいるからです。

冒頭に述べた研究会で、「教師は子どもを登校させようととても熱心に関わるが、熱心にやりさえすれば問題が解決するというものではない。熱心にするのと子どもを好意的に見ることとは違う。子どもや保護者は好意的に見てもらっているかどうかを敏感に感じ取るものだ」と事例発表にたいして助言者よりコメントがありました。

子どもが元気になり、部分登校や別室登校などの段階を経て学校生活にチャレンジしようとするれば、当然、先生方の援助が必要となります。けれども、熱心さのあまり子どもや保護者を追い詰めてしまっては先生方のせっかくの努力がむくわれません。先生方が不登校の子どもたちを援助する上で手がかりとなるものをもとを考えまとめました。参考にさせていただけるとうれしく思います。

更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載